

「機能」と「画質」の二極化が進む

薄型テレビの今後は、録画対応機などの「付加価値型」か、LED搭載機などの「画質追求型」に二分される。2つの流れを取り入れているのが東芝とシャープだ。

録画対応

東芝

LED対応は上位モデルのみ
HDDへの録画はほぼ標準

最上位シリーズやCELL REGZAでLEDに対応。ほとんどのモデルでUSB接続型HDDへの録画が可能。製品によっては内蔵HDDなどにも録画できる。



シャープ

ハイエンドモデルでLEDを採用
録画対応機はBDに記録する

LED搭載モデルは上位シリーズだけ。BDドライブを内蔵し、録画やBDソフトの再生に対応したモデルもある。HDD録画に対応した製品はない。



三菱電機

BDとHDDに録画が可能
LED搭載シリーズはない

HDDとBDドライブを内蔵したシリーズを唯一用意している。2番組同時録画にも対応するなど、機能はレコーダー並み。チューナー部と液晶部が分離しているワイヤレスモデルもある。



日立コンシューマエレクトロニクス

カセット式HDDに対応
プラズマと液晶を用意

下位モデル以外はすべてHDD録画に対応している。録画は内蔵HDDのほか、カセット式のHDDである「iVDR-S」も使える。プラズマと液晶のラインアップを用意しているが、LED対応モデルはない。



パナソニック

録画先は内蔵HDDのみ
小型機の一部にLEDを採用

内蔵HDDへの録画に対応したシリーズを1つだけ用意している。アンテナ内蔵タイプの17型モデルだけはLEDを採用。日立と同様にプラズマと液晶の製品を用意している。



LED採用

ソニー

無線対応の薄型製品を用意
オプションで録画に対応

3シリーズでLEDを採用。LEDを搭載し、チューナー部が分離している薄型ワイヤレスモデルもある。録画機能を内蔵した製品はないが、別売りでHDMI接続タイプのHDDレコーダーが用意されている。



DとBDの対応製品を発売。「録画対応機としては後発のため、存在感のある製品を目指した」(三菱電機)。

HDDタイプの製品を発売しているのはパナソニック、東芝、日立コンシューマエレクトロニクス。対応しているHDDは、内蔵HDD、外付けHDD、カセット式HDDなど製品によって異なる。ソニーの場合はテレビ単体で録画に対応する製品はなく、別売りのHDDレコーダーが用意されている。

液晶の高級機からLEDが浸透
プラズマは新型パネルで対抗

バックライトにLEDを搭載した液晶タイプの製品も広がっている。LEDは従来の蛍光管よりも消費電力を下げられるのが特徴の一つ。複数のLEDを並べて別々に発光させることにより、明るさを調整できる「エリア駆動」も可能になる。こうしたメリットから、LEDは現在の蛍光管に代わるバックライトとして注目されている。

ソニーは、色域を広くできるRGB LEDを採用したエリア駆動タイプのモデルや、パネルの側面にLEDを配置した薄型のエッジライトモデルを08年に発売。シャープも同時期にRGB LEDのエリア駆動モデルを市場投入した。09年は、ソニーはエッジライトモデルの第2弾、シャープは白色LEDの全面発光タイプを発売。現状ではLEDにさまざまな方式が混在している。その性能の良しあしが気になるところだ。

東芝は09年からLED搭載機を投入。白色LEDでエリア駆動可能な製品を

発売した。高価格多機能モデルの「セルレグザ(CELL REGZA)」(90インチ)でもLEDを採用する。

今後の普及が見込まれているLEDだが、実際の製品では各社の試行錯誤が続いている状態のようだ。また、価格はまだ高め。従来の蛍光管採用テレビのほうが技術や画質が成熟しているため、値ごろ感がある。

一方、プラズマテレビを擁するパナソニックは、従来の2倍の発光効率で消費電力を大幅に減らせる新パネル搭載機を09年に発売。2010年にはさらに効率化した製品の投入を予定する。

新しい技術や機能が注目されているテレビ市場。しかし、09年は不況の影響か、例年秋ごろに登場する新製品がほとんどなく、「ある意味、異常な状態」(業界関係者)。多くのシリーズをリニューアルしたのは東芝だけだ。

そのため量販店などでは異変が起きている。09年春ごろに発売された各社の高級機の一部は後継が発売されないまま現行モデルとして大幅に値下がり。09年秋に登場したいくつかの普及機と同等の価格になっているのだ。

「古い高級機」と「新しい普及機」、選ぶべきはどちらなのか。エコポイントの影響で人気となっている40型台で20万円前後の製品の使い勝手をテストしたほか、LEDなどの最先端パネルを使った各社のハイエンドモデルの実力を徹底検証。また、今や標準機能の一つになりつつある各社の録画機能の操作感も見た。さらに競争が激化する際に役立つ値引きテクニックも紹介する。

すべてがわかる地デジ必須キーワード

17

フルHD

1920×1080ドット(百万画素)の映像を表示できる画解像度を「フルHD(Full High Definition)」と呼ぶ。テレビ画面の水平方向の線である「走査線」の数は1080本以上。これまでのアナログ放送では、640×480ドットのSD(Standard Definition)画質が主流だった。だが、地上デジタル放送のハイビジョン番組の解像度は、1440×1080ドットが一般的。BSデジタル放送の一部では、フルHDによる番組も放送している。

LED

Light Emitting Diode(発光ダイオード)の略。液晶テレビのバックライトとして使われることが多い。CFL(冷陰極蛍光灯ランプ)やHCCFL(熱陰極蛍光灯ランプ)よりも低消費電力で、薄型化できることがメリット。水銀などを含まず、環境負荷が低いことも注目されている。複数のLEDの発光をコントロールして映像のコントラストを高める「エリア駆動(ローカルディビング)」や、光源を液晶パネルの上下左右に配置してテレビを薄型化する「エッジライト」などの技術でも使われている。



光源であるLEDを液晶パネルの背面に配置する「直下型」は、明るさを部分駆動できるローカルディビングに応用しやすい。

テレビのサイズ

テレビの大きさを示す「〇型」や「〇V型」は、基本的には画面の対角線の長さを示したものの、「40型」のテレビの場合、画面の対角線は約40cm。ただ、対角線の長さが同じでも、4対3のブラウン管と、16対9の液晶やプラズマテレビなどのフラットパネルでは画面の大きさが異なる。ま

DVDビデオはSD解像度

	主な解像度	映像ソースの例
SD	640×480	アナログ放送、DVDビデオなど
	720×480	
HD	1280×720	地上デジタル放送、BSデジタル放送、BDソフトなど
	1440×1080	
	1920×1080	

登場時に「高画質」とうたわれたDVDはSD画質。同じ「HD画質」でも、地デジやブルーレイなどコンテンツにより解像度は大きく異なる。

B-CASカード

ビーエス・コンディショナルアクセスシステムズ(B-CAS)が開発した、デジタル放送の視聴時に必要な接触式ICカード。BSデジタルの有料放送などのユーザー認証のために開発された。現在は、地上デジタル放送などの著作権保護の目的にも使われている。テレビやレコーダーのスロットに差し込まないと、デジタル放送を視聴できない。09年11月には携帯機器向けのmini B-CASカードも登場した。



EPG

Electronic Program Guide(電子番組ガイド)の略。テレビ放送に使われているのと同じ電波で配信される番組表データ。配信時から約1週間後までのテレビ番組スケジュールやその内容、出演者名、あらすじなどを含む。それらの情報をもとにして、番組検索や録画予約ができるテレビもある。

超解像技術

映像コンテンツの解像感をさらに向上させる技術。単純に解像度のみを上げるのではなく、映像のコマとコマを比較・解析し、画質そのものを向上させる。その結果、DVDビデオやネットコンテンツなどをハイビジョン対応テレビの大画面でも違和感なく楽しめるようになる。東芝のテレビに搭載されている「レゾリューションプラス」などはこうした技術を応用したものの。



年間消費電力量

実際の利用状況を想定した条件で1年間使用した場合に消費される電力量の目安。単位は「kWh/年」。テレビの場合、省エネ法に基づき、1日当たり4時間視聴した場合の電力と残り19・5時間分の待機電力を合わせた電力量を1年分に換算したもの。年間消費電力量に1kWh当たりの電気料金を掛けると1年間に消費するおおよその電気代がわかる。

セットトップボックス

テレビと接続し、ケーブルテレビや衛星放送などを見られるようにする機器。Set Top Boxを省略して「STB」とも呼ぶ。セットトップボックスを使用するケーブルテレビサービスの場合、放送波を変調して伝送する「トランスモジュレーション方式」を採用していることが多い。そのため、地上デジタル放送対応のテレビやレコーダーでは放送を直接受信できず、ハイビジョン画質での録画などは難しい。ケーブルテレビサービス会社によっては、録画機能付きのセットトップボックスを提供しているところもある。なお、セットトップボックスが不要なケーブルテレビサービスは「パススルー方式」を採用していることが多く、その場合は地上デジタル放送対応のテレビやレコーダーで直接受信できる。

DLNA

Digital Living Network Allianceの略。製造メーカーが異なる機器同士でもコンテンツを共有・再生できるようにするための規格、あるいはそのガイドライン作りをする団体を指す。DLNAに対応した製品であれば、例えば家庭内LANなどの同一ネットワークに接続されたレコーダー内の映像をほかの部屋にあるテレビで再生することが可能。寝室や書斎に置くセカンドテレビの機能として注目されている。対応機器はテレビやレコーダーだけでなく、パソコンやオーディオ機器、ゲーム機、デジタルカメラなど幅広い。

HDMI

High Definition Multimedia Interfaceの略。テレビやレコーダーなどのデジタル家電の信号入出力用に規格化されたデジタル端子を指す。映像と音声の信号を一本のケーブルで伝送でき、取り回ししやすいのが特徴。パソコンとディスプレイの接続規格であるDVIを基に開発された。HDMI接続した機器同士で制御信号を送受信できる「HDMI-CEC規格」(92頁)を利用すれば、レコーダーの電源に連動してテレビも起動するといった操作が可能。



端子はやや大きめ。ビデオカメラ向けの小型版もある

D端子

レコーダーやデジタルチューナーの映像信号をテレビなどへ送る映像端子の一種。対応する解像度などにより、D1からD5の5つの規格がある。デジタル信号には対応しておらず、アナログ信号のみを扱う。端子の形がアルファベットの「D」に似ていることから「D端子」と名付けられた。



HDMI端子と異なり、D端子は映像信号のみを扱うため、音声信号は伝送できない

データ放送

電波のすき間を利用して、文字情報や双方向サービスを提供する補完放送。放送されている番組の内容に関連した連動型や、文字情報のニュースや天気予報、交通情報などを扱う非連動型などがある。テレビに付属するリモコンの「データ」ボタンを押すと視聴中の放送局が提供するサービスが表示され、住所が登録されていれば地域情報なども利用できる。ネットに接続すればクイズなどの双方向サービスも可能。録画対応モデルの一部には、番組のデータ放送部分まで記録できる製品もある。



番組の関連情報などを表示。シャープのDXシリーズは、データ放送も記録できる

IPTV

インターネット回線を利用して、映像や音声コンテンツをテレビなどへ配信するサービス。アンテナがなくとも視聴できる。テレビの場合、パナソニック、ソニー、シャープ、東芝、日立製作所などの家電メーカーが出資した「アクトビラ」や、NTTの「ひかりTV」に対応している製品が多い。アクトビラは提供するコンテンツによってサービスが分かれており、静止画や文字情報のみの「アクトビラ ベーシック」、SD画質の映像が中心の「アクトビラ ビデオ」、HD画質の映像も配信さ

れる「アクトビラビデオ・フル」などがある。基本的に利用料はコンテンツごとに課金される方式。ひかりTVは視聴する「チャンネル」により月額料金が異なる仕組みだ。

AVC録画

ハイビジョン放送などの高画質な番組を圧縮して記録し、解像度を変えずにデータ容量をより小さくする録画方式。「AVC-REC」とも呼ぶ。圧縮規格には「MPEG4 AVC/H.264形式」が用いられる。例えばパナソニックのテレビ「VIERA ATH-PA46R1」の場合、300GBのHDDに標準モードで地デジ番組を約64時間録画できるが、AVC録画を利用した長時間モードでは、約91時間の録画が可能になる。

RFリモコン

主流の赤外線ではなく、高周波(Radio Frequency)の電波を利用したリモコン。赤外線リモコンのように本体側に受光部を設置する必要がなく、リモコンをテレビに向けてなくても操作できる。双方向通信が可能などの特長で、ソニーの「おき楽リモコン」では非接触式ICカードのフェリカにも対応。テレビの高機能化に対応する技術として、今後の主流になるとみられている。



ソニーの一部製品のリモコンは、アクトビラコンテンツのEdy決済が可能

RGBセンサー

テレビを置いた場所の明るさや照明の色温度などを検知するセンサー。テレビの前面に配置されていることが多い。人間の目の見え方は周囲の明るさや色に影響を受けやすい。RGBセンサーを使えば、周辺環境に合わせて画面に表示する映像の明るさや色温度を調整し、人間の目で見た場合に違和感がないように補完できるようにする。従来の明るさセンサーは照度のみを検知するため、波長が異なる蛍光灯と電球は自動で区別できなかった。

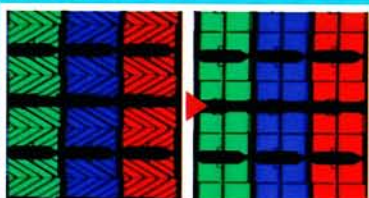


倍速技術

1秒間に表示するコマ数を2倍に増やすことで、映像の動きを滑らかにする技術。60コマ/秒(60Hz駆動)の地デジ番組信号は120コマ/秒(120Hz駆動)に変換される。前後のフレーム情報などから新たにフレームを生成する。機能を調整し、効き具合を変えられる製品もある。40型以上の標準モデルではほぼスタンダードな機能になったが、小型モデルでは搭載していない製品が多い。ソニーの一部機種は4倍速(240Hz駆動)に対応している。

需要が急増する高開口率パネル

通常のパネルよりも光を通しやすい、高開口率パネルを採用した製品が今後は増えていくとみられる。明るさを向上できる高開口率パネルは、「高速駆動などで画面が暗くなりちな3D映像にも役立つ」(テクノ・システム・リサーチ)。



シャープが開発した高開口率パネルは、従来(上左写真)のようなスリットがなく、バックライトの利用効率を高められる

新タワー完成でアンテナの方向はどうなる?

2011年末完成予定の「東京スカイツリー」から放送波が発信されるようになった場合、アンテナの向きはどうすればいいのか。「東京23区内などは電波が強いので向きは問題なし。郊外から見た場合は現東京タワーとほぼ同じ方向なので、こちらも変える必要はない」(NHK)。



スカイツリーの高さは634mの予定で、NHKや在京民放キー局の番組を発信する

AQUOS LC-46LX1 09年11月発売

シャープ・実勢価格34万8000円

ややクセのある画質 ネット機能は充実する

LEDバックライトと光の利用効率が高い液晶を組み合わせたモデル。コントラストが高くメリハリのある画質だったが、明るい部分をやや強調しすぎという声もあった。ただ、ネット機能の使い勝手は良好。価格もLEDモデルとしては非常に手ごろだ。

画質

△コントラストは高く見栄えは良いが、標準設定では映像が明るめ。「やや黒が沈みきっていないシーンもあった」(折原氏)。ただ、画質を自分好みに簡単に換えられるのが特徴。落ち着いた画質も選べる

使い勝手

○EPGは1度に閲覧できる情報量が多かった。操作にもたつきが感じられなかったが不満のないレベル。アクトビラやひかりTVなどに対応。2番組を同時に見ながらネットが使えるなど、操作性は良かった

46型液晶

- サイズ・重さ／幅116.2×高さ74.8×奥行き28.7cm・25.5kg(スタンド含む)
- 主な端子／HDMI×3、D5×2、LAN×1●年間消費電力量／143kWh/年

①初期設定時に表示される写真から好みのものを選択して画質を調整する



②大画面でテレビ番組を見ながら、ネット機能呼び出せる



③EPGの表示は最大6時間×9チャンネル。拡大縮小はやや面倒

音質ではシャープが一歩リード

薄型化に伴って音質は悪くなりがちだが今回の4機種はどうか。山本氏、折原氏と音質をチェックした。その結果、ディスプレイの周囲に6つのスピーカーを備えるシャープと、サイドスピーカーのパナソニックの音質が良好だった。



メーカー	機種名	音質
東芝	46ZX9000	「低音に迫力がない」(折原氏)。薄型テレビとしては平均的な水準
ソニー	KDL-46ZX5	低音はある程度出ているが、「若干音がこもり気味」(山本氏)
パナソニック	TH-P46Z1	「音に広がりがあった」(折原氏)。低音も十分出ている
シャープ	LC-46LX1	薄型テレビとしては音質が良く、「低音が力強かった」(山本氏)

ネット機能は今後のスタンダード装備に

アクトビラやひかりTVなどのIPTVは、今後さらに普及することが見込まれる。最新型の高額なテレビを買うのであれば、長く使えるものにすべきだ。IPTVなどのネット機能に対応しているかどうかは重要な要素になる。今回取り上げた4機種

種はどれもアクトビラのビデオ・フルには対応しているが、ひかりTVにも対応するのはシャープと東芝の2機種のみ。そのなかでもシャープはネット関連のインターフェースが使いやすく、ネット機能を重視するなら選択肢になる。



④アクトビラ以外のサービスに対応しているかどうかには差が出る

	東芝 46ZX9000	ソニー KDL-46ZX5	パナソニック TH-P46Z1	シャープ LC-46LX1
IPTV	アクトビラビデオ・フル	アクトビラビデオ・フル	アクトビラビデオ・フル	アクトビラビデオ・フル
	ひかりTV			ひかりTV
ネット動画	Yahoo! JAPAN	—	YouTube	Yahoo! JAPAN
DLNA	○	○	○	○

注) 代表的な対応ネットサービスを掲載した。LC-46LX1のDLNA機能は、写真や音楽の表示・再生にのみ対応

初の“汎用型”ワイヤレス機器が登場

超薄型テレビの普及に伴い、テレビの設置方法の自由度が高まった。そんなときに便利なのがHDMIのワイヤレス機器。HDMIに対応したレコーダーやパソコン、テレビなどを無線で簡単に接続可能。ただ、価格は高めだ。



HDMIワイヤレストランスミッター「AEM-W20」(エイム電子)の実勢価格は、約23万円

東芝に続くのが、パナソニックとソニー。どちらも暗部の階調表現など東芝に譲る点はあるが、映画の雰囲気を感じられた。一方、シャープは、標準設定では白が明るく出る傾向があり、見栄えの良い印象。ただ、「明るくなりすぎるシーンもあった」(折原氏)。

総合的に見ると、「画質重視」なら、迷わず東芝が買いたい。価格は約50万円と高額だが、それだけの価値はある。一方、「スタイル重視」なら最薄部が1.7cm弱と極薄ながら画質が良好だったソニーも選択肢になる。

機能や使い勝手の面で差が出たのが、アクトビラなどのIPTV(79頁参照)への対応とネット機能の操作性だ。4機種中でアクトビラとひかりTVに両対応するのは、東芝とシャープのみ。なかでもネット機能の使い勝手が良かったのは、シャープだ。テレビを見ながら簡単にネット機能を利用できるなど、操作性の良さは魅力だろう。



評価項目

1 画質

地上デジタル放送やBS放送のほか、BDの映画ソフト、キュー・テックの画質評価ソフトを使用し、AV評論家の山本浩司氏と折原一也氏の協力の下で評価した。画質モードは、テレビ番組では「標準」または「オート」、映画では「映画」を選択。照明は、テレビ番組では一般的なリビングと同程度に調整。映画では部屋を完全に暗くした

2 使い勝手

普及機クラスでは、ハイエンドモデルに比べて、インターフェースやネット機能が省略されることが少なくない。EPGは、見やすいか、週間表示や裏番組表示といった基本機能を備えているかを調べた。ネット機能は、標準となりつつあるアクティブラ以外に対応するIPTVはあるのかなどを比較。また、リモコン操作の反応速度も重視した

BRAVIA KDL-40W5 09年4月発売

ソニー・実勢価格17万8000円

クセのない画質が最大の魅力。使い勝手も良好 Best

画質の評価は、6機種中で最も高かった。さまざまな映像を自然な色合いで表現し、緻密感、階調感も高い。唯一4倍速パネルを搭載するため、残像が少ないのも魅力。使い勝手も良好で、動作が速く、リモコンも使いやすい。だが機能面では、標準で録画に対応する日立、ひかりTVも視聴できるシャープには一歩譲る。

画質

映画、放送波ともに6機種中で、最も評価が高かった。明暗が混在した表現が難しい場面でも破綻することが少なく、クセのない自然な画質。「緻密感、階調感も高い」(山本氏)。「圧倒的に残像が少ない」(折原氏)ため、スポーツなど動きの激しいコンテンツの視聴にも優れる。映画も「明暗のグラデーションの作り方がうまい」(山本氏)など、コンテンツを選ばず、画質は高い

使い勝手

EPGは1度に表示できる情報量が多い。よく使う外部機器や機能を専用ボタンで呼び出せるといった工夫があり、全般に動作速度も速かった。テレビに向ける必要がない無線リモコンも魅力。ネット機能は対応する主要IPTVがアクティブラだけと平均的。ただし、画面に天気予報などを表示できる



40型液晶 地デジチューナー×2

●サイズ・重さ／幅96.1×高さ64.9×奥行き30.3cm・20.1kg(スタンド含む) ●主な端子／HDMI×4、D5×2、USB×1、LAN×1 ●年間消費電力量／182kWh/年



①唯一4倍速パネルを搭載。効き具合を調節可能



②EPGは最大で6時間×9チャンネルを表示可能。拡大・縮小、裏番組表の呼び出しも簡単だった

画質に優れ、割安感があるソニー

20万円40〜42型売れ筋モデル

エコポイントの導入で、売れ筋が以前の37型からより大型のモデルにシフトしている。人気は40〜42型。店頭価格は20万円前後だが、エコポイントや販売店のポイントも含めると実質15万円前後で購入できるようになったからだ。主要メーカー各社が力を入れているのもこのクラス。冬商戦で注意したいのは、新旧の機種が混在していること。新機種を発売したのは東芝、三菱電機だけ。他メーカーは09年の春や夏に投入したモデルを、冬も現行モデルとして引き続いて販売している。

その結果、価格のこなれてきた高級機、新型の普及機という本来なら比較対象にならないモデルが、同価格帯で入り交じる激戦になっている。では、買うに値する機種はどれか。実勢価格が20万円前後の40〜42型6機種を比較した。画質は、テレビ番組と映画を中心に評価。また使い勝手では、最上位機種では当たり前にあったネット関連の機能が省かれていないかなどを見た。総合力が最も高かったのは、ソニーが09年春に発売した「BRAVIA KDL-40W5」。画質は「視聴コンテンツを問わず、安定している」(山本氏)という評価だった。唯一4倍速パネルを搭載し、「動きの速い映像でも圧倒的に残像が少ない」(折原氏)のも強みだ。機能や使い勝手にも欠点は少ない。特に本体に向けなくても操作できる無

Wooo L42-XP03 09年4月発売

日立コンシューマエレクトロニクス・実勢価格18万8000円

録画重視なら有力候補 画質、機能も不満なし

画質の評価はソニーに次ぐ水準で、欠点は少ない。魅力は、使い勝手。唯一HDD(250GB)を搭載し、番組を録画できる。またEPGの使い勝手も良く、動作速度も速い。ネット機能は平均レベルだが、録画機能を重視するのであれば、有力候補に入る。

42型液晶 地デジチューナー×2 HDD内蔵

●サイズ・重さ/幅102.4×高さ71.5×奥行き31.6cm・23.9kg(スタンド含む)●主な端子/HDMI×3、D4×2、LAN×1●年間消費電力量/127kWh/年



④対応する主要IPTVはアクティブラだけと、ネット機能は平均的



画質

○ソニーに次ぐ水準。「弱点が目立たず、どのコンテンツを視聴してもバランスがいい」(折原氏)。気になったのは「色合いが若干薄く、暗部の階調表現がやや甘め」(山本氏)だった程度で、総合力が高い

使い勝手

◎EPGは1度に表示される情報量が多い上に、右上に視聴中のテレビ画面が表示されるなど使いやすい。全般に動作も素早い。ネットへの対応は平均的。6機種で唯一HDDを内蔵し、録画できる

VIERA TH-P42V1 09年3月発売

パナソニック・実勢価格19万2000円

独特の色を気に入れば 機能面に穴は少なめ

画質、使い勝手ともに弱点は少ない。画質は、ソニーには譲るが、日立には匹敵する高評価だった。独特の濃い色合いが好みであれば選択肢に入る。特に映画の画質は高い。YouTubeの視聴に対応するのも特徴。ただ、EPGの閲覧性はやや見劣りする。

42型プラズマ 地デジチューナー×1

●サイズ・重さ/幅105.2×高さ70.9×奥行き33.2cm・29kg(スタンド含む)●主な端子/HDMI×4、D4×1、LAN×1●年間消費電力量/200kWh/年



⑤専用のブラウザーを利用することで、6機種の中で唯一、YouTubeの動画を再生できるのは魅力



④リモコンの専用ボタンを押すと画面下部にアイコンが表示され、機能呼び出せる



⑥EPGは最大12時間×19チャンネル。左端には広告が入る。裏番組表は呼び出しが面倒で、情報量も少なめ



画質

○映画の視聴ではソニーに並ぶ高い評価。「階調表現に優れ、質感の表現力が高い」(山本氏)。ただし色の濃さが強調されるため、特に「放送波では不自然に感じる場面があるかもしれない」(折原氏)

使い勝手

○EPGには広告が掲載されるため、番組情報の表示面積はやや狭い。動作は、ソニー、日立、東芝に比べるとややもたつくが気にならない水準。6機種の中で唯一、YouTubeの視聴に対応する

線リモコンはとても使いやすい。2番手は日立コンシューマエレクトロニクスの「Wooo L42-XP03」。画質はソニーに次ぎ、さまざまなコンテンツを視聴しても不満がなかった。「色みがやや薄味だが、特に映画では白と黒の質感を両立できている」(山本氏)。操作性も良好だった。魅力は250GBのHDDを内蔵し、標準で録画に対応する点。カセット式HDD「iVDR-S」にも録画できる。

3番手はパナソニックの「VIERA TH-P42V1」。画質、使い勝手ともに弱点は少ない。なかでも映画の画質は「ソニーに迫る」(山本氏)。ただ、色が濃い印象で、好き嫌いは分かれそう。テレビ番組を視聴したときに違和感を抱くシーンも少なくなかった。機能面では唯一、YouTubeを閲覧できるのが特徴だ。

ここまでの3機種は、春発売のモデルが占めた。一方、6月発売のシャープ「AQUOS LC-40DS6」、10月発売の三菱電機「REAL LCD-40MZ300」、11月発売の東芝「REGZA 40R9000」の3機種は、特徴的な機能は備えるが、基本機能で上位3機種に見劣りした。

まずシャープは唯一、ひかりTVに対応するほか、ウェブサイトと放送波の2画面表示が可能など、ネット機能に優れる。ただし画質は「明部や輪郭が強調されすぎで、立体感が足りない」(折原氏)などと厳しめの評価だった。

三菱電機は、画質の評価は高め。クリアパネルと超解像機能が効き、「コントラスト感が高く、精細感もある」

The Final Countdown

AQUOS LC-40DS6 09年6月発売

シャープ・実勢価格18万8000円

ネットには強いが、画質で一步譲る

主要IPTVはアクトビラに加えて、ひかりTVにも対応するなどネット機能が充実し、操作性も高い。ただし画質では、精細感や立体感などの面でやや見劣りした。

画質

△「全般に精細感がない」(山本氏)うえ、やや明るさが強調されている。そのため、暗部の表現が低めで立体感も薄い。「輪郭が強調されているので放送波には向く」(折原氏)

使い勝手

◎ EPGは1度に表示できる情報量が多い。リモコンの応答速度はやや遅めだが気にならない水準。アクトビラに加え、ひかりTVに唯一対応するなど、ネット機能が充実している

40型液晶 地デジチューナー×1

●サイズ・重さ／幅99.2×高さ68.5×奥行き29.3cm・20kg(スタンド含む) ●主な端子／HDMI×3、D4×2、LAN×1 ●年間消費電力／163kWh/年



④ EPGの表示は最大6時間×9チャンネル。週間表示はできないが、裏番組表示は可能



⑤ 唯一インターネットとテレビの2画面表示に対応。加えてアクトビラのほか、ひかりTVにも対応するなどネット機能では最も優れていた

REAL LCD-40MZW300 09年10月発売

三菱電機・実勢価格19万8000円

画質は水準以上。操作性で見劣り

超解像機能を備えたパネルによる画質は、水準を超える。だが使い勝手に難があった。特にリモコンの応答速度が遅いのが弱点。インターネットにも対応しない。

画質

○ 画質は弱点が少なく、「バランスが良い」(山本氏)。クリアパネル採用の効果で、コントラスト感も高い。「一般受けしやすい味付けで、特に放送波で実力を発揮する」(折原氏)

使い勝手

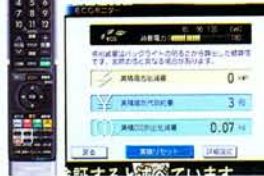
× EPGや裏番組表は表示面積が狭く、情報量が少なめ。リモコンの応答速度がほかの機種に比べて際立って遅く、ストレスを感じた。ネット機能を備えない点も見劣りする

40型液晶 地デジチューナー×1

●サイズ・重さ／幅93.1×高さ69.0×奥行き34.2cm・25.4kg(スタンド含む) ●主な端子／HDMI×4、D4×2、LAN×1 ●年間消費電力／147kWh/年



④ EPGは最大8時間×9チャンネルで、広告も掲載。裏番組表示は情報量がやや少なめ



⑥ 省エネ設定にした場合の電気代やCQ2の削減量などを表示可能。リモコンで画面の向きを左右30度まで変えられる

REGZA 40R9000 09年11月発売

東芝・実勢価格21万8000円

操作性は良好。画質、ネットが弱み

EPGや動作速度など使い勝手に欠点はない。だが、画質は残像がやや目立ち、暗部の階調表現が甘めなど弱点が目立つ。ネット機能を一切備えない点も見劣りする。

画質

△ 超解像機能を搭載し、精細感が高く、コントラスト感もある。だが、「暗部はつぶれることが多く、階調表現が物足りない」(山本氏)。「視野角も他機種より狭め」(折原氏)だった

使い勝手

○ EPGは1度に閲覧できる情報量が多いうに、見やすかった。全般に動作も素早い。外付けHDDを使えば、録画も可能。ただしインターネットに一切対応しない点には不満が残る

40型液晶 地デジチューナー×2

●サイズ・重さ／幅97.7×高さ67.6×奥行き31.6cm・18.5kg(スタンド含む) ●主な端子／HDMI×3、D4×1、USB×1、LAN×1 ●年間消費電力／146kWh/年



④ EPGの表示は最大6時間×7チャンネル。週間表示はできないが、裏番組表示は可能



⑤ USBの外付けHDDをつなげば、番組を録画できる。USBハブを用い、最大4台まで同時に接続可能。ジャンルごとに録画先を指定できる



(折原氏) 弱点は操作性だ。リモコンの反応速度がかなり遅い。またEPGの情報量が少なく、ネット機能に全く対応しない点も見劣りする。

東芝は、外部HDDに録画できるのが特徴。全般に操作性にも不満はない。ただ、ネット機能には非対応。また画質は、「ほかの5機種に見劣りする」というのが山本氏と折原氏の共通した見解だった。この「R」シリーズは、本誌09年7月号の製品テストでは比較的高評価だった「C」シリーズの後継機。CではIPSパネルを採用していたが、RではVAパネルに変えている。一般的に「VAはIPSよりも価格が安い」(業界関係者)といわれており、低コスト化が画質の評価に影響した可能性もある。

結論としては、総合力で選ぶのであればソニーで決まり。価格も安い。録画も求めるなら日立。映画視聴を重視するならパナソニックも選択肢に入る。

録画対応モデル ストレスがなくてラクに使える日立

シェアを伸ばし続ける録画対応のテレビ

ここ最近、録画機能を搭載した薄型テレビが売れている。08年後半から販売台数が急増。09年10月には、薄型テレビの販売台数の約18%を占めるまでになった。ただ、「録画対応テレビ」と一概に言っても、各社で機能は大きく異なる。HDDやBDなど、録画できる媒体もさまざま。そこで今回は、各社の最新録画対応モデルの使い勝手を比べてみた。

■薄型テレビの販売台数のうち、2割近くが録画対応



■HDDの増設が簡単な日立、東芝。三菱はHDDとBDの両方に対応

メーカー名	録画メディア	対応機種
日立	内蔵HDDのほか、カセット式HDD「iVDR-S」に対応	H03シリーズを除く全モデル(32～50型)
パナソニック	内蔵HDDにだけ録画可能。同社のレコーダー経由でBDにダビングすることができる	Rシリーズだけ(17～50型)
三菱電機	内蔵HDDのほか、BDにも録画できる	BHR300だけ(32～37型)
シャープ	BDにだけ録画可能。HDDは非搭載	DXシリーズだけ(20～52型)
東芝	内蔵HDDのほか、USBもしくはLANで接続した外付けHDDに録画できる	ZX、HシリーズはHDD内蔵(32～55型)。Z、Rシリーズは外付けHDDを接続すれば録画できる
ソニー	HDD内蔵モデルはなく、別売りのHDDレコーダーを接続して録画に対応	録画ユニットは、HDMIに対応した全モデルにつなげて利用できる



評価項目

1 録る

テレビ番組視聴中の録画やEPGからの予約録画などの操作感をチェック。どれだけ簡単にできるかを見た。また、操作が機敏で使いやすいかどうかも評価に加えた

2 見る

CMなどの番組の変わり目に自動でチャプターを付加する「オートチャプター」やタイムシフト機能はがあると便利。また、録画した番組の管理のしやすさも重要だ



3 その他機能

いかに簡単に使えるかが最も大切だが、録画番組の分割やチャプター分けなどもあるとうれしい機能。2番組録画やワンセグ録画、外部メディアへの番組の保存などの機能も見た

最も使いやすかったのは、ほぼすべてのモデルが録画に対応する日立。03年から録画対応の薄型テレビを手がけているだけあって、操作性がこなれていた。視聴中にリモコンの専用ボタンを押せば、一発で録画が開始。再度ボタンを押すと、録画終了のタイミングを選べるなどと、非常にわかりやすい。EPGも、録画予約した番組の背景が

録画機能を備えたモデルが増え、売れ行きを伸ばしている。「1台目、2台目以降を問わず、消費者の注目度が最も高い機能の一つ」(ヨドバシカメラ)という。録画対応機の販売台数ベイスのシェアは2割近くに達している。ただ、ひとくちに「録画対応テレビ」と言っても、その方式はメーカーによって違う。HDD内蔵モデルを用意するのは、パナソニック、東芝、日立コシニエレクトロニクス、三菱電機の4社。日立はカセット式HDD「iVDR-S」、三菱電機はBD、東芝はUSBなどで接続したHDDにも録画できる。シャープはBDだけに対応。ソニーは別売りのHDDレコーダーを本体背面に取り付ける方式を採用する。肝心の使い勝手もメーカーによって大きく異なる。そこで、「いかに簡単に録画できるか」「録画番組を快適に再生できるか」を中心に、使い勝手を比べた。また、「専用レコーダー並みに機能が充実しているか」も見た。



録画予約した番組には、アイコンが表示される。広告が出るので、EPGの表示範囲はやや狭め

できることは非常に多いが操作がややもたつく場面も

BHR300のみ録画に対応。320GBの内蔵HDDに加え、BDドライブも備える。オートチャプターによるCMカットや編集機能を搭載するなど、テレビとしてはできることが非常に多い。ただ、リモコンでの操作時にやや待たされることがあるのが気になった。



2番組同時録画

①内蔵HDDには地デジが約40時間録れる(通常録画時)。5.5倍の長時間録画モードにも対応



②50GBのBDには、地デジが約6時間録画できる(通常録画時)

- 録る**
○ 視聴中録画の使い勝手は平均的な部類。予約録画は簡単にできた。操作は遅め
- 見る**
○ オートチャプター、録画番組の複数削除に対応。録画リストはやや見にくかった
- その他機能**
◎ 録画番組の分割などの編集機能を備える。HDDからBDへのダビングも簡単

BD録画方式のシャープ「AQUOS SDX2」は、日立に匹敵する操作性が長所。視聴中の録画、予約録画ともに簡単に操作できた。EPG横に予約リストを、視聴画面横に録画番組リストを表示できたりと使い勝手も良好。ただ、タイムシフト機能がなく、オートチャプターが時間単位でしか区切れないなど不満な機能も少なくなかった。



録画予約した番組には、アイコンが表示される。EPGの表示範囲は、広告が出るのでやや狭め

ワンセグ録画は魅力だが使い勝手は平均的なレベル

Rシリーズのみ録画に対応。内蔵HDDは250GBもしくは500GB。HDDの増設はできない。録画は簡単にできるが、録画番組の複数消去ができないなど管理機能にはやや不満点があった。ただ、ワンセグを持ち出してケータイで見られるなど、特徴的な機能を備える。



①らくらくアイコンを使えば、予約した番組の一覧などを簡単に呼び出すことができる



②500GBのHDDには、地デジが60～65時間録れる。約1.5倍の長時間録画モードにも対応。地デジ番組の録画時に、ワンセグを同時に録画できる



- 録る**
○ 予約録画は非常に使い勝手が良く、視聴中の録画も簡単にできる。動作はやや遅め
- 見る**
○ オートチャプターに対応する。録画した番組は、1つずつしか消去できない
- その他機能**
◎ ワンセグを同時に録画。同社のレコーダー経由で、録画番組をBDに移すことも可能

三菱電機「REAL BHR300」は、唯一HDDとBDの両方に録画可能な点が特徴。2番組同時録画や録画番組の編集など豊富な機能を備えるため、BDレコーダーの代替えにもなり得る。だが、画面表示など多少待たされる印象。録画時の設定方法などもややわかりにくかった。



Best

録画予約した番組がピンクに色付けされるなど、EPGの使い勝手は良かった

操作がこなれた万能モデルHDDの増設もラクにできる

ほぼ全機種が録画に対応。機能、使い勝手ともに穴がなかった。内蔵HDDは250GBか500GB。BDには保存できないが、「録って、見て、消すだけ」という人には最適だ。iVDR-Sで簡単に容量を増やせるのも魅力。ただし、iVDR-Sは320GBで1万5000円程度とBDやUSB接続のHDDに比べて単価は高い。



③保存用フォルダーを作成できる。500GBのHDDには、地デジを60～65時間(通常録画時)録画可能。8倍の長時間録画モードもある④別売りのiVDR-S



- 録る**
◎ 視聴中の録画もEPGからの予約録画も、非常に簡単。動作は全体的にスムーズだった
- 見る**
◎ オートチャプターに対応。録画番組の複数削除やフォルダーごとの削除も可能
- その他機能**
◎ 録画番組の分割やチャプター分けなど編集機能が充実。HDDの増設も簡単だ

色付けされるなど、見やすいように工夫が施されている。録画番組の管理にも優れ、オートチャプターといった基本機能も不足はなかった。日立の数少ない弱点は、録画番組の持ち出し機能。iVDR-Sは、まだ対応機器が少ない。録りためた番組は、録画した本体で視聴する使用スタイルが中心になりそうだ。一方、パナソニック、三菱電機、シャープ、東芝には一長一短がある。パナソニック「VIERA」シリーズの魅力は、ケータイに持ち出できるワンセグデータを同時に録画できる点。加えて、一部の同社製レコーダーにつなげば、BDにも書き出せる。ただし、画面表示などが日立と比べるとやや遅め。また、複数の録画番組を一括消去できないなど、細かな管理機能や設定面でも日立にやや譲った。



ソニー



テレビのEPG。ここから録画予約はできるが、予約確認などはレコーダー側の画面で行う

煩雑な印象の操作性が弱点 「簡単さ」で他メーカーに譲る

BRAVIAに別売りのHDDレコーダーをHDMIケーブルでつないで録画する。録画予約はテレビ側のEPGからできるが、予約の変更などはレコーダー側の画面を開く必要がある。テレビと録画ユニットそれぞれにリモコンがあり、操作はやや煩雑。機能も限られる印象だ。



⑤HDDレコーダー側のEPG(下)HDDレコーダーのリモコン



④(BRX-A300)(実勢価格4万円)のHDDは320GB。地デジを約39時間(通常録画時)録れる。約2.3倍の長時間モードも



録る
△視聴中録画では「番組終了まで」という設定がない。操作もやや面倒。動作は遅め

見る
△映像の切れ目ではなく、等間隔でチャプターを付ける。録画番組の複数消去はできる

その他機能
△ほかより優れる点はあまりない。機能は、基本的なものに限られる



東芝



録画予約した番組には、アイコンが表示される。操作は非常にスムーズだった

HDDの増設が安価にできる 操作性には細かな不満点も

HDDを内蔵するのは、ZXとHシリーズ。容量は500GB。使い勝手に関しては目立った特徴はなく、平均的な部類。ZXはワンセグ録画にも対応する。HDDの増設が安くできるので、録画できる時間を気にしなくて済むのは魅力だ。ZとRも、USB接続のHDDをつなげば録画に対応する。



⑤HDD間でデータを移せる⑥USB接続用HDD「THD-50A1」(容量500GB)。内蔵でも外付けでも、500GBのHDDの場合、地デジを約50時間録れる



録る
○視聴中録画、予約録画ともに穴はないが、操作の簡便さでやや目立って譲る。動きは速かった

見る
○オートチャプターには非対応。録画した番組を複数選択して消去できる

その他機能
○～◎2番組録画はZとZXのみ対応するなど、機種ごとに機能が異なる



シャープ



録画予約した番組には、アイコンが表示される。予約情報がEPGの左側に出るのは便利だ

「ラクに録る」には不足なし BDゆえに機能には制限あり

DXシリーズのみBDドライブを備える。HDDは非搭載。タイムシフトができないなど機能面には制限があるが、基本的な操作は非常に簡単だった。BDを挿入するだけで再生が始まるなど、プレーヤーとしての使い勝手も良い。ただ、BD1枚の容量はHDDに比べて少なく、ディスク交換の手間はかかる。



④⑤テレビ画面を表示しながら、録画した番組のリストを表示。50GBのBDには地デジを約6時間録画できる(通常録画時)。7倍の長時間録画にも対応



録る
◎視聴中の録画、EPGからの予約録画ともに簡単に操作できた。操作時のスピードも良好だった

見る
△映像の切れ目ではなく、等間隔でチャプターを付加。複数消去、タイムシフトに非対応

その他機能
○書き換え型のBDを入れておけば、容量は少ないが、HDDのように使える



結論としては、録画機能を重視するのであれば、操作がシンプルで使い勝手の良い日立が最有力候補になる。

東芝は「REGZA ZX」「H」シリーズがHDDを内蔵し、標準で録画に対応。「Z」「R」シリーズもUSB接続したHDDへ録画できる。ZとZXは、2番組録画やワンセグ持ち出しも可能。ただ、いずれのモデルもオートチャプターには対応しない。録画の開始や時間・画質の設定も、日立などと比べるとやや複雑だった。

残るソニーは、操作性に難があった。録画には、別売りのHDDレコーダーユニットをテレビ背面に取り付けることで対応。録画の開始や予約など基本的な操作はテレビ側の画面でできるが、予約録画の変更などは、レコーダー側の画面で行う必要がある。基本機能も限られる。この組み合わせであれば、専用レコーダーを購入したほうが良いと感じられた。